そして世界が終った頃に……

モンスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
そして世界が終った頃に……

【Ｎコード】
Ｎ２００５Ｚ

【作者名】
モンスター

【あらすじ】
我々は長い間の平和な暮らしの中で当たり前に感じていると思う。だがそんな当たり前な世界が突如、地獄へと変わったら人々は生き残れるだろうか・・・人類滅亡へのカウントダウンスタート！

第０章　始まり（前書き）

久しぶりのオリジナル小説です。完成度の高い小説を目指します。

第０章　始まり

皆は今の生活が普通のことだと思っているだろう。
長い間この生活を続けていたら誰だってそう思うだろう。
だがそんな世界は一つの出来事により崩壊した・・・

１２月３０日　ＰＭ１１時　東京のあるアパート
どこからかドアを叩いている音がした。
その男が目を覚ますと確かに玄関のドアを叩いてる馬鹿がいた。
「クソ、誰だ？こんな時間に」
男は玄関まで行くとドアを開けた。
「おい！うるさ・・・い・・・ぞ・・・」
いきなり肉が腐ったような匂いがした。
それもそのはずだろう・・・目の前には全身血だらけの男が居た。
目は白目。
腕は変な方向に捻じれ、さらにはその肉は腐っていた。
「お、おい！近寄るな！」
だが奴はお構いなしに俺へと近づいてきた。
奴が近づくたびに臭いはひどくなった。
なんとか部屋の中に戻ったがあることに気づいた。
玄関の扉を開けたままなのを・・・
案の定、奴は入ってきた。
「や、やめろ！うわーーーーー」
奴は俺を押し倒し腕を噛み始めた。
最後に見えたのは噛みちぎられた俺の腕だった・・・

その後男を喰い殺し、悲鳴を聞いてやって来た人々を喰い殺して

いった。
たった一体なら無理だろうがそれは問題ではなかった。
なぜなら奴らは噛めばそいつを仲間にできるから。
アパートから出ると真っ直ぐにマンホールの場所に行った。
マンホールを開けるとそれは中に入っていった。

これは今後起きる大事件の小さな始まりだった・・・

第０章　始まり（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第1章　異変（前書き）

登場人物を募集するので出して欲しいキャラを送ってきてください。
良かったら採用します。

第1章　異変

東京・立川市　１２月３１日　ＡＭ７時

この日も俺は朝から起こされた。

（全く……大晦日だっていうのに）

こんな大晦日の日に朝早く起こされたのには訳があった。

昨日、母さんに病気でお婆ちゃんが倒れたと聞き、今日は大晦日だけどその看病に行くのだ。

寝ぼけながら階段を降りていった。

俺の家族は、母さんと二人暮らしで父さんは小さいときに死んでしまった……

車の事故だった。

リビングに入ると既に母さんが外行きの服に着替えていた。

「翼、起きたのね」

俺……遠藤翼は、冷蔵庫からミルクティーを取った。

俺は、実は～ティー系が大好きでこれまでずっと飲んできた。

「は～、相変わらずね。それはそうと……今から九州に居るお婆ちゃんの所に

行くから。母さんが居ないけど大丈夫よね？」

「大丈夫だって。俺もうすぐ大学生だぜ」

それは本当の事だった。今高３で、４月になると大学生になる。
そしてこの家から出ていき一人暮らしを始める予定だった。

「そうだけど……最近この辺りで謎の殺人事件が起きてるでしょ」

最近起きてる事件というのは、人がどうやったらこんな風になるのかというほどの
有様だった。なぜなら全身から噛みあとが発見されたり警察は野犬の可能性も
指摘していた。・・・まあそんなことはある訳ないのだが。

「それより時間は良いのか」

母さんは壁に掛かってる時計を見た。

「まあ！もうこんな時間。もう行ってくるから戸締りちゃんとしてね」

それだけ言うと声をかける前に部屋から出ていった。

（はあ～～暇だな・・・そうだ！あいつらを呼ぼう！）

あいつらとは俺の友達、一人目は神山和俊。俺達のムードメイカーだ。
二人目は石井翔。俺達の高校のナンバーワンと言ってもいいほどのイケメンである。

早速電話をかけた。二人とも快くＯＫしてくれた。

２０分後・・・

ようやくチャイムが鳴った。

玄関の扉を開けると和俊と翔が立っていた。

「おう！翼」

「久しぶり！翼」

二人を中へと入れると俺たちは二階へ上がった。

「例のものは持ってきてくれたよな」

例のものとはただのＰＳＰだった。

「ああ、持ってきてるぜ！」

「俺もだ」

二人ともＰＳＰを出した。

今から何をするかというと・・・

「じゃあモンハンやろうぜ！！」

しばらくモンハンをやり続けた俺たちは時間が経つのを忘れるぐらい熱中していた。

外の異変にも気づかないままに・・・

「良し！クエストクリア！」

クエストをクリアした俺たちは俺の提案でＰＳＰを一旦止めた。

「そういえば今何時だ？」

翔が言ってきた。

「ああ、えーと今は・・・２時だな」

そこで和俊が突っ込んできた。

「夜中の？」

「なわけねーだろ！昼のだよ」

そうだ！二時から観たいテレビがあったんだ！

「ちょっとテレビ見るぞ！観たいドラマの再放送があるんだ」

テレビをつけるとドラマはやってなく、緊急放送とテロップが入ったニュースを
やっていた。

「何だこりゃ・・・」

そこにはありえない映像が映っていた・・・

第1章　異変（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第2章　蘇り始めた死者

テレビで流れている映像は驚愕のものだった。

東京・テレビ局

「練馬区や立川市で起きている暴動について情報が入りました。政府の発表によると一度死んだ人が蘇って人を襲っているとのことです」

そのテレビのアナウンサーは半信半疑な感じで言った。

「死者が蘇った理由として政府は、化学兵器説、魔術説、侵略説などなど多数の説が
上がっていますが理由は不明です。さてこの蘇ったとされる死者は
足は遅く、目は白目、
全身の肉が腐っており一目見ただけで分かりますが、蘇った死者たちは物凄い数です。
決して練馬区や立川市へは近寄らないでください。その辺りに住んでる人々は、
最寄りの避難場所へ行くか、東京を出るかそれとも家で鍵をかけて
決して外には
出ないでください。繰り返します～」

「……今死者が蘇ったとか言ったよな……しかもここや（立川）や練馬区って……」

「エイプリルフールじゃね？」

「あのな～今日は12月31日の大晦日だぞ。明日は新年なんだぞ」

俺が突っ込み翔が口を開いた。

「さっきのことが本当か確かめる方法があるぞ」

「ホントか！？」

「ああ、この家から外を見たら分かる。本当に死者が蘇っていたら外もそれなりの騒ぎになってるだろう」

「さすが翔！」

とりあえず部屋の窓を開けた。

「マジかよ……」

外は地獄の様だった……

死者が人を喰ってたりそこらじゅうに血だまりが出来たりしていた。

その時銃声が聞こえた。

「おい！あれを見ろ」

奴らに居場所がバレないよう小声で言った。

警官が外で死者に向け発砲していた。

「助けるか？」

和俊が言ったが俺はまだ様子を見ようと言った。

銃弾は死者たちの腹などに当たるが動きが少し止まるだけで警官に少しずつ

近づいっていった。その内、警官の銃の弾が無くなり入れ替えようとしたときに

死者に囲まれてそのまま押し倒され噛み殺された。

これ以上見てられない状態になり窓を閉めた。

三人は、床に座り込んだ。

「これからどうする？」

「俺は家に帰ろうと思ってる」

和俊が良い翔も「俺も」と言った。

「分かった。まずは親に電話してみたらどうだ」

二人とも一斉に携帯で電話をかけた。

俺も母さんに電話するために一階に置いてある携帯を取りに行った。

携帯を取ると母さんの電話番号を押した。

「ただ今、大変電波が込み合ってます」

母さんは出ず機械の音声が聞こえた。

「ちくしょー！」

携帯を投げ捨てそうになり慌てて止めた。

その時二人が降りてきた。

「ダメだ……繋がらねー」

どっちの携帯も繋がらなかったようだ……

「俺の母さんは九州に居ると思うから大丈夫だが、お前らはどうする？」

「俺は、今一人暮らしだからな。両親は埼玉に住んでるから大丈夫だろう」

翔は良かったが和俊は違った。

「俺は家族がまだ家に居るんだ」

「そうか……なら助けに行こう。良いよな翔？」

「ああ、ダメと言っても行くんだろう」

「その通りだ。とりあえず武器になりそうなものを持ってこよう」

とりあえず武器を集め始めた。その結果が金属バットを二本と、

木製バットが一本だ。
なぜこれだけバットがあるかというと俺が野球部だからだ。
「俺が金属バットを持つからあとは勝手に決めてくれ」
和俊が金属バット、翔が木製バットを持ち玄関に向かった。
「良し、行くぞ！」
ドアを開けようとしたとき隣の部屋の窓ガラスが割れる音がした
……

第2章　蘇り始めた死者（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第3章　情報

窓ガラスが割れたのは隣のリビングだ。

「和俊、翔、行くぞ！」

一気にドアを開けた。そこには窓ガラスを破って侵入してきた死者が居た。

死者は俺たちに気づくと襲ってきた。

「来んじゃねー！」

鉄バットでホームランを打つようにフルスイングして死者の腹に浴びせた。

死者は吹き飛んだが再び立ち上がった。

（おかしい……確かに骨が折れた感覚がしたのに）

再び襲ってきた死者に今度は棚から落ちてきた野球ボールを顔面に投げつけた。

彼はピッチャーであったから肩を温めてなくても１３０キロはあった。

顔面に命中し死者はあとずさったがそれでも死者は近づいてきた。

「クソ！どうすれば止まるんだよー！」

怒りに任せて死者の腕にバットでフルスイングした。
今度は腕が折れる感覚がした。
腕がブランとなってもまだ近づいてきた。
その時、小さいときに見たゾンビ映画の知識を思い出した。
「お前ら！こいつの後ろに回って気を引いてくれ」
翔と和俊がうしろに回って気を引いた。
「おい！クソヤロー！こっち向きやがれ！」
死者が和俊の方に振り返ると俺は死者の後頭部にバットを叩きつけた。
頭が割れ、死者は2度目の死を向かえた。
「ハア、ハア、終わったか……」
床に座り込んでしまった。
（初めて誰かの命を奪ってしまった・・・）
「翔、和俊、窓にバリケードを造ってくれ。当分立ち直れそうにない」
座りながらテレビを点けた。

ちょうど総理の会見が行われていた。

「既に同じような現象は日本中、いや世界中に広がってます。全人類は全滅の危機にあるのです！
東京はほとんどの地域が壊滅し、機能を停止してます。一刻も早く東京から脱出してください。
政府は沖縄に移動されます。東京から脱出できない場合は、自衛隊の駐屯地または避難所へ行ってください。以上で会見を終了します」

その時気づいた。我々が長い年月をかけて造り上げた世界が急速に終焉へと向かってることを……

「翼、終わったぞ」

割れた窓の所には棚や机が置かれてた。

「このまま和俊の家族を助けに行こうとも今のままでは外へ出れば5分ももたないだろう。
だからテレビやパソコンで情報を集めるべきだ」

「ダメだ！それなら俺一人で行く」

和俊が一人で行こうとするのを翔が止めた。

「待て！今一人で行くのは自殺行為だ。さっきのを見ただろう。一体でも苦労する相手が外に行けば数百人は居るぞ！もし俺たちがこの状態で行って死ねばお前の家族を助けるのも永遠に無理になるんぞ！！」

翔の言葉は和俊に聞いた。

「分かった。好きにしろ。だが最高でも一時間だぞ」

翔は笑いながら言った。

「ああ。それまでには終わる」

一時間後……

パソコンやテレビでたくさんの情報が手に入った。

それを簡単にまとめてみよう……

1、死者（ネット上ではゾンビと呼ばれていたためこれからはゾンビと呼ぶ）は、知能は無く目は見えない。
だが以上に耳と鼻が発達しておりさらに大抵そばには仲間がたくさんいるので物凄い驚異となる。
弱点は頭でありその他の部位をいくら攻撃しても倒れることはない。
銃弾を腹に何発も浴びても倒れなかったという報告もある（確認済み）
噛まれるだけでゾンビの仲間入りするので噛まれたものは置いていくか殺したほうが良い。

2、ゾンビ出現により東京はほとんど壊滅しており政府は沖縄に移された。
自衛隊は避難所や駐屯地、発電所や原発、その他重要な地域を守るのに精一杯で救助に来ることはまずない。

3、世界中で同じような現象が起きており外国に逃げるのは得策ではない。
無人島や離島に逃げるのが得策だろう（避難所は多数の人間が来るのでそれにまぎれてゾンビが来るのでやめておいたほうが良い）

4、東京で略奪者や頭のイカれた者たちが確認されてるので注意したほうが良い。

5、これから食べ物が手に入るかが不明なので家にある保存が効く食べ物を持っていったほうがいい。武器はリーチの長いものが良い。近づけば近づくほど噛まれやすくなるからだ。

とまあこれだけの情報が手に入った。

三人はダウンを着て用意した食べ物をカバンに入れ武器を持った。

時計を見ると4時になっていた。

「よし、行くぞ！」

俺は玄関の扉を開けた。

第3章　情報（後書き）

次回、別目線から始まります。

第４章　到着（前書き）

今回は陸自隊員と三人の話です。

第４章　到着

東京練馬区　１２月３１日　ＰＭ１時

翼たち三人がモンハンをしている時……

俺、神崎優斗は陸自隊員であり今日は休暇だった。

いつもは訓練に励む時間も今日はゆっくり出来た。

だがそのせいでとても暇だった。

（さて……暇だな。そうだ！散歩でもするか）

玄関の扉を開け外に出た。

目の前を血まみれの女性が走っていった。

そのうしろをさらに血塗れの男女が追いかけていった。

肉が腐ったような匂いがした。

（何だ？今のは）

彼は見過ごすか迷ったがそこは自衛官。女性を追いかける男の一人の肩を叩いた。

「止まれ！！何者だ！？」

ものすごい腐肉の匂いがした。
その男が振り返ると腕に噛みつこうとした。
ギリギリのところでその男をよろめかせた。
男は何もないところで歯を「カツン」と言わせた。
男は再び近づいてきた。
「クソ！何なんだよ」
俺は家に向かって走った。
だが家に行くとさっきの奴と同じような奴のが数十人居た。
（どこへ行けばいいんだよ！？）
その時路地が見えた。
（あれを使うか）
だがもし前からもきたら挟み撃ちにされ自殺行為だ。
そこまで危険を冒したのは既に囲まれていたからだ。
路地に入ると目の前から奴らが来ないことを祈った。
神は俺に味方した。

無事に路地から出ると横からゾンビが飛びかかってきた。
押し倒されたが顔面にパンチを食らわせよろめいたところを逃げた。
目の前にコンビニが見えた。
とりあえずそのコンビニに入ることにした。
コンビニに入ると店員の服を着た奴が近づいてきた。
「クソ！ここもか」
俺は、そいつに飛び蹴りを浴びせた。
そいつが倒れている隙にコンビニの奥へ向かった。

ＰＭ４時

扉を開けると雪が降ってきていた。
さらに夕暮れに近づきつつある静寂を保つ世界を奴らが打ち壊した。
そうゾンビだ……
外には二人の乗ってきた自転車があったが自転車は転けたりパンクした時に何かと不便なので歩いて和俊の家へ向かった。
周囲に居たゾンビは、ざっと１０人。全員を倒すのは難しかったから避けながら走ることにした。

「和俊、翔、出来るだけゾンビは避けろ！あと頭は狙うな！動きが封じられるからな。最低よろめかせるだけでいい」

俺が先頭に立ち走り出した。

バットで目の前に居たゾンビの腹に叩きつけた。

ゾンビは倒れ道ができた。

「行くぞ！」

三人は走り出した。

ゾンビ共を出来るだけ避けつつ、何とか和俊の家の前に着いた。

「早く来い！」

和俊が玄関の鍵を開け扉を開けた。

急いで中に入り鍵を閉めた。

「誰か居ないのか！？」

一階を捜すと誰も居なかった。

嫌な予感がした。

「おい！オヤジ、お袋、優樹菜」

優樹菜とは和俊の妹で今高1だ。

和俊の妹にしたら可愛い。

二階に上がって彼女の部屋に入ると入口にバットを持った優樹菜が立っていた。

第４章　到着（後書き）

当分最初に自衛官の話が入ってきますが主に３人の話です。

第5章　出発（前書き）

次回で自衛官と合流します。

第5章　出発

優樹菜はバットを振りかざし和俊を殴ろうとした。

「ま、待て俺だ！」

寸前のところでバットをとどめた優樹菜はバットを捨てた。

「何だお兄ちゃんか、奴らが来たと思って。そうだ、翼も翔も久しぶり！」

（相変わらずタメ口か……）

「そういえば二人は？」

「それが……外の様子がおかしいって事で様子を見に行ったらそれっきりで……」

部屋の椅子に優樹菜が座りながら言った。

目にはうっすら涙が見えた。

俺たちも床に座りながら話した。

「そうか……大丈夫だ！　二人ともきっと生きている」

その時ヘリのローター音が聞こえた。

「何だ！？」

優樹菜の部屋からベランダに行き上を見た。
そこには自衛隊のヘリが見えた。
種類は何か分からなかったが今はそんなことは関係ない。
救助が来たのだ。
「おーい！助けてくれ！！」
他の皆も叫び続けたがヘリはそのまま飛び去った。
「クソ！　なんで気づかないんだよ」
部屋に戻り椅子を蹴った。
「ちょっと翼！それ私のよ」
（はあ～顔は可愛いのだが性格がなあ～）
ヘリが去ってから再び話し出した。
「これからどうする？」
４人とも考え始めた。
「そうだ！　まずはこの近くにあるコンビニに行って食料を探しに行こう」

この意見にみんな一致したが問題があった。

「誰が行くのよ。それに外には奴らが居るのよ」

翔が答えた。

「俺と翼で行こう。和俊と優樹菜はこの家で最新の情報と武器や食料を集めてくれ」

今度もまた意見は一致した。

その時喉の渇きに気づいた。

「和俊。何か飲み物はないか？」

「ああ、下に冷蔵庫がある」

４人で飲み物を取りに行った。

一階のキッチンにある冷蔵庫を和俊が開けると入ってる飲み物を全て出した。

３人は水やお茶などを飲む中、俺はレモンティーを取った。

「はあ～こんな時までもか」

翔が聞こえないぐらいで言った。

休憩を終え出発の準備をした。

カバンを持ちボコボコになった金属バットを持ち翔もボコボコになったバットを持った。

行こうとしたとき優樹菜に止められた。

「本当に行くの？」

「ああ、このままここに居ても食料は無くなる。なら略奪が来る前に手に入れたほうが良い」

それでも反論してきた。

「もし略奪されてたり略奪者と鉢合わせしたらどうするのよ！」

「その時はその時だ。和俊！俺たちが行ったら鍵を閉めといてくれ。あと玄関の近くにいろよ。俺たちが帰ってきたらすぐ分かるように」

玄関に向かいドアの鍵を開けた。

最後にうしろを振り返ると優樹菜が「馬鹿じゃない」と言った。

イラっとしたが我慢して「行ってくる」とだけ言い家を出た。

同時刻・とあるコンビニ

中に居た奴らを何とか奥の部屋に誘き寄せ閉じ込めた。

その後モップの柄を折り武器とした。

（当分は大丈夫だがいつか食べ物は尽きる……さてどうするか……）

奥にあった椅子に座って菓子パンを食べながら思った。

さらに同時刻・あるヘリ内

そこに数名の自衛官……正確には元自衛官と一人の議員がいた。

「まさかこんなことが起きるとは、思いもせんかった。だがこれは利用できる。私が新たなる世界のトップになる時が来たのだ！」

議員は脱走した自衛官数名に言った。

（ちっ、うるさい奴だ。何が世界のトップだ。だがこれは楽しめそうだ）

ある元自衛官の一人……天月光輝も何かを企んでいた。

第5章　出発（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第6章　爆発（前書き）

今回クオリティー落ちてる。

第６章　爆発

ＰＭ４時３０分

外に出てそばのゾンビを殴りつけ転けている隙に一番近くのコンビニに走った。

近づいてくるゾンビを何とか蹴散らしながら進んだが車が大破して炎上しており道を通れなくしていた。

そうこうしている内にゾンビ共に囲まれた。

「翔！　どうするんだよ！？」

翔は近づいてくるゾンビを吹き飛ばしてから言った。

「俺に考えがある！　まずはその家に入るぞ！」

翔が指さした家に走った。

ドアを開けようとしたが鍵がかかっていた。

「翔！　駄目だ。閉まってる」

翔が追いついた。

「大丈夫だ。裏に回れ！」

裏に回ると行き止まりだった。

「翔！　何が大丈夫だ、行き止まりじゃないか」
翔は落ちていた石を拾い近くの窓ガラスを割った。
「これでもか？」
「お前……そんな過激だったけ？」
その時ゾンビの呻き声が聞こえた。
「翼！　早く入れ」
翔がやって来たゾンビ共を殴りつけながら言った。
ケガをしないよう来ていたダウンを使って窓のガラスの破片がある
ところに敷いた。
中に入るとすぐに翔も入ってきた。
そこはリビングのようだった。
「その窓を塞ぐぞ」
近くにあった机やタンスを使ってバリケードを造った。
だがこのままでは１０分と持たないだろう。
「翔、さっき言ってた作戦は？」

翔は答えずにリビングから出た。

「お、おい。待てよ」

翔が向かったのはキッチンだった。

翔は全てのガスを全開にした。

「何する気だ？」

「ここを爆破するのさ」

翔の作戦とはまず玄関のドアを開けゾンビ共を中に入れ二階の窓からロープを使い脱出し、その後爆発させるというものだった。

だが問題があることに気づいた。

「どうやって爆発させるんだ？」

それで翔は苦笑いした。

「そうだった。やっぱり映画みたいには上手くいかないか……なんてね」

翔はタバコを取り出した。

「……まさかそれで爆発させようと……」

「そうだ。最低爆発しなくても二階から出ることができる」

「てかそれどこで拾ったんだよ」

「ああこれ、さっき道に落ちてた」

とりあえず玄関のドアを開けた。

「おーい！　腐ったゾンビ共！　こっちに来やがれ！」

案の定ゾンビたちはやって来た。

丁度リビングのバリケードも破壊された音がした。

急いで二階に上がり適当な部屋から持ってきたロープを垂らした。

「翔！　先に行ってくれ」

翔がロープから降りると俺もロープに手をかけた。

その時ゾンビたちがやって来た。

「早くしろ！」

翔が下から叫んだ。

そこでようやく下に降りた。

タバコに持ってきたライターを使い火を点け窓の中に投げた。

幸いにも一階の窓に入れた。

「こっちだ！」

翔が走り出した。

俺も全力で走った。

その瞬間、背後で大爆発を起こした。

爆風で俺と翔は吹き飛ばされた。

気づけば俺たちは倒れていた。

幸い近くにゾンビは居なかったが、今の爆音ですぐにやってくるだろう。

翔も起き上がった。

「大丈夫か？」

翔を立たせた。

「ああ、それにようやくついたぞ」

翔が見ている方を見るとコンビニがあった。

「もう二度とこんなことはしたくないぜ」

「全くだ」

コンビニに入ると先客がいた。

「動くな！」

モップの柄を突きつけられた。

突きつけたのは男性で年は俺たちよりは年上でコンビニの店員じゃなかった。

「名前を言え」

「俺は遠藤翼でこっちが石井翔だ。貴方は？」

男はモップを降ろしてから言った。

「俺は神崎優斗……陸自隊員だ」

これが自衛官、神崎優斗との出会いだった。

第６章　爆発（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

突然の登場人物紹介

遠藤翼　１８歳　Ｏ型
現在高３で来年から大学生。ゾンビ出現以前は高校野球のピッチャーであり５番でもあった。
ゾンビ出現以後はバットを使い、ゾンビ共を打ち倒している。和俊、翔とは小学からの親友。
主人公。

神山和俊　１８歳　Ｏ型
翼と同じで高３。テニス部に所属している。優樹菜は妹。
３人のムードメイカー。

石井翔　１８歳　Ａ型
翼、和俊と同じく高３。バスケ部所属。学年一のイケメンと言われ告白されまくりだが誰かと付き合ってるということはない。結構過激。

神山優樹菜　１６歳　Ｏ型
和俊の妹であり翼、翔とは昔から仲が良かった。
翼、和俊、翔、優樹菜は全員同じ高校。ソフトボール部に所属する。

神崎優斗　２５歳　Ｂ型
陸自隊員で成績優秀。休暇中に今回の事件に巻き込まれる。天月光輝とはライバル。

天月光輝　２５歳　ＡＢ型
陸自隊員。神崎優斗のライバルである。今回の事件を使い何かを企んでいる。

謎の国会議員　不明　不明

今回のゾンビ出現を使って何かを企んでいる。ちなみに事件を起こしたのは彼ではない。

今回の事件はたまたま起こったことである。

突然の登場人物紹介（後書き）

御意見、御感想、御質問、御待しております。

第7章　新たな仲間

ＰＭ５時

「えーと神崎さんは、今起きてることが分かってないんですか？」

あの後、何とか打ち解けた二人は、今起きてる現象が何なのかを神崎さんに教えていた。

「ああ、散歩に出たら外には変な奴が大量に居て襲われてそのままこのコンビニに来んだ」

「分かりました。とりあえず簡単に説明します」

その後、今外を歩いてるのはゾンビで既に東京は奴らに壊滅状態にまでされたこと。

政府は沖縄に移動し、自衛隊は、重要な場所を守ることに精一杯で多分救助は来ないこと。

などを話した。

「そうか……じゃあ今外に居るのは墓から蘇ったゾンビで救助に来ることはまずないということか」

神崎は何かを考え始めた。

と、そこで大事なことを思い出した。

「そうだ神崎さん。実は俺たちここに食料調達に来たんですけど」

「ああ、良いよ。ただし条件がある」

（条件……？）

「何ですか？」

「俺も一緒に行っていいか？」

一瞬思考が止まった。

「何だそんなことですか。良いですよそれぐらい」

「じゃあそうと決まれば食料を集めるぞ」

その後店内の生物以外のものを集めた。

集め終わると入口のとこに集まった。

「じゃあそろそろ行きますか……」

翔が言った。

「俺が先に行くから二人はあとからついてきてくれ」

そういうと神崎は先に行った。

「俺たちも行くぞ！」

神崎の背中を追いかけながら近づいてきたゾンビたちをバットで殴った。

そこで気づいた。

（そういえば神崎さん。和俊の家知らないんじゃ……）

「神崎さん！止まってください」

神崎が立ち止まるとゾンビたちが近づいてきたから早口で言った。

「俺が先に行きます」

それだけ言うと走り出した。

先程の爆音でゾンビが大量に集まっていた。

一体のゾンビの頭を叩き割るとゾンビが俺に噛みつこうとした。

「なめんじゃねーーー！」

右足でゾンビの腹を蹴り、よろめいたゾンビの顔面をバットで殴った。

周囲を見渡すと囲まれていた。

二人とも集まってきた。

「どうする？」

翔が近づいてきたゾンビの頭をバットで殴りながら言った。

「俺に考えがある。まずはあのガソリンスタンドに行け！」
神崎が言ったガソリンスタンドはすぐのとこにあった。
ゾンビ共を殴りつけながら俺は気づいた。
殺すことに戸惑いがなくなったことを……
ガソリンスタンドに着くと神崎さんはライターを取り出した。
「翔はそのガソリンを辺りにばらまけ！翼は援護しろ！」
言われるままに翔はガソリンをばらまき俺はゾンビを倒し続けた。
油断してた……というわけではない。だが少し甘かった……考えが……
死んだと思っていたゾンビが生きていたのだ……
「危ない！！」
翔の叫び声が聞こえた。
ゾンビが立ち上がり噛みつこうとした。
防ごうとしたが違うゾンビも近づいてきた。
（やられる……）
死を覚悟したがその時、二度銃声が聞こえた。

噛みつかれた痛みは来なかった。

おそるおそる顔を上げると拳銃を持った男が居た。

第7章　新たな仲間（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

第8章　二度目の爆破（前書き）

どんどんとクオリティーが落ちてきている……

第8章　二度目の爆破

ＰＭ５時

拳銃を持った男はさらにゾンビに発砲した。

ゾンビの頭には当たらないものの立ち直る時間稼ぎにはなった。

「急いでこっちに来い」

神崎さんがうしろから叫んだ。

回れ右して行きそうになったが男性のことを思い出した。

「あなたも来てください」

男は頷くと走り出した。

戻ると神崎さんはライターを持っていた。

（まさか……）

そうここを爆発させようとしているのだ。

神崎さんは俺たちに下がらせた後ライターを点けながらガソリンがばら撒かれてるとこに落ちた。

その後のことはよく覚えてない……走りながら背後で大爆発が起き、俺の意識が無くなった。

ＰＭ５時２０分

ふと気がつくと辺りは暗闇に包まれていた。

時計を見ると５時２０分だった。

（なぜこんなことに……そうだ！　確かガソリンを使って爆発させたんだ）

周囲を見渡すとゾンビ共は歩いてなくガソリンスタンドは燃えていた。

その後、翔や神崎さん、俺を助けてくれた人を起こした。

「みんな怪我は無いな……てそういえば名前は？」

俺を助けてくれた人に神崎さんが聞いた。

「俺の名前は須藤健太……元ヤクザだ」

須藤健太さんの話はこうだった。

ゾンビが出現する前の日に仲間とのトラブルから殺害。その際に拳銃を奪って逃走して今までずっとこの辺りに潜伏していたとのことだ。

「そうだったんですか」

ヤクザと聞いて一瞬驚いたが自分を助けてくれたことを思い出した。

「須藤。お前も俺たちと一緒に来るか？」

須藤は悩んでる様子だったがすぐに答えた。

「分かった。ここにいても別に何の得も無いからな。今は誰かの役に立ちたい」

（ヤクザだけど意外と良い人なんだな）

「じゃあ行きますか！」

新たに増えた二人の仲間と共に和俊の家へ向かった。

ＰＭ５時３０分

「急げ！！」

ゾンビ共が近づいてくるのを防ぎながら須藤が言った。

須藤は拳銃を持っているのはいいが腕はあんまり良くないことが分かり神崎さんに渡していた。

だから須藤はモップの柄を使いゾンビ共を近づけないようにしていた。

神崎さんが拳銃を使って近づいてくるゾンビの頭を撃ち抜いた。

だがゾンビは多すぎた。

「駄目だ。このまま家に入れば奴らに居場所がバレる」

須藤が言った。

「ともかく消防署に入れ！」

消防署は近くにあった。

４人はゾンビを倒しながら消防署に入った。

「扉を閉めろ！」

急いで入ってきた扉を閉めバリケードを造った。

「これで一安心だな……」

その時背後から気配を感じ振り返ると消防士の服を着たゾンビが立っていた。

「神崎さん」

神崎は振り向くとゾンビに向け発砲した。

銃弾はゾンビの頭を撃ち抜きゾンビは倒れた。

「本当の一安心だな……」

奥から大量の呻き声が聞こえた。

それは大量のゾンビが中に居ることをしめしていた……

第8章　二度目の爆破（後書き）

御意見、御感想、御待しております。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2005z/

そして世界が終った頃に……

2011年12月18日06時45分発行